

ピアノ基礎技法

～基礎の和声感のためのバイエル教則本～

Basic Piano Techniques : BEYER for Basic Harmony

(2013年3月31日受理)

大 山 佐知子

Sachiko Oyama

Key words : 和音伴奏

“Bayer” has few harmonies. So it is easy to change them to a simple harmony. We will show effectively how to practice by the simple harmony.

バイエルピアノ教則本は、少ない和声で作られている。そういうことで、それは、より簡単な和音に変えやすい。ここでは、簡単な和音でどのように練習することが効果的かを考察する。

1. はじめに

バイエル教則本（以下“バイエル”と記す）は、日本で良く使われている教則本である。筆者は、初心者にとって、この教則本を勉強することは、鍵盤と指の一体化を身につける上で、また、総合的なピアノのバランス感覚を身につけるうえで大変有効であると、中国学園紀要第7号で述べた。

今回は、初心者の中でも、特に短期大学で保育者を目指す学生にとって、“バイエル”をどのように活用すればよいかを考察する。

“バイエル”は、1～2年間かかっても丁寧に練習して身につけることが、総合的にピアノの上達を目指すためには、理想の方法である。

ここでは、“バイエル”を半年で少し読む効果をどのように考えたらよいか。『譜面を読むことが難しい初心者に、和音をつけた伴奏を短期間で考えられるようにする』目標を目指し、強引ではあるが試みる方法を提案する。

短大生は、大変忙しい。本来の専門教科である保育に関する知識を山ほど勉強しながら、初心者でも両手での

弾き歌いを1年生のうちに身につけることが、要求されている。初心者には、無駄のない練習方法が必要である。本来、初心者にとって、譜面を読み始めることは、最初は単旋律でも思う以上に時間がかかり、根気の要る作業である。譜面をできるだけドリル式に多く読むことは、とても労力がかかるだろうということが想像できる。自主的に練習をと薦めても、多くの課題をしてやっと身につく方法は、初心者のほとんどの短期大学の学生が選べない。優先順位として保育者に必要な、直接的な課題に時間がかかり、しかも余裕がない人ほどピアノの練習時間も作れない。最初から少しでも入学前までに習っていて両手の曲を弾ける人と、レベルの格差が広がる一方なのが現状である。

初心者ほど譜読みの仕方ですぐ行き詰まる。初心者は、ほとんどの人が単旋律を右手、左手と別々に練習し、やっと両手で一度に合わせてみるものの、読み始めた段階で、まだ“バイエル”の7番くらいでも、両手が少しでも違うと1音ずつで止まって弾き直してしまう。その後、早々と嫌気がさしてしまうことが多い。片手が弾けたからと言っても、両手にするとすぐに弾けなくなるのは普通である。片手で弾くのと両手で弾くということは、単旋律

の五線譜に比べ、目の見方が大きく変わらなければいけない。複旋律の大譜表の譜面は、目で今弾いている場所の上下左右を常に素早く見る必要が起こるのだ。この段階で、すぐに‘できない’という決定的な第一印象ができてしまう。これは‘最初の譜読みの段階で大譜表を一度に見る’というすぐ両手で弾く練習ができていないと絶対にと行っていいほどできない技術である。当たり前であるが、この‘できない’繰り返しに嫌気がささない人はいない。こうして大多数の初心者は、楽譜が読めないもどかしさを克服できないまま、2年生の実習では、“弾き歌いは不得手”というレッテルを持参することになる。ここで、ピアノ嫌いが決定してしまう。

この現実を少しでも変えたいものである。

上達の効果が見えれば、やる気も出るのではと考える。再度、言う。『譜面を読むことが難しい初心者に、和音をつけた伴奏を短期間で考えられるようにする』ことを目指す必要があると提案する。

「せめて、ドミソ、シレソ、ドファラ（伴奏としての3つの基礎和音）は簡単な歌につけられるようになってほしい。」と、よく言われるのを聞く。音楽指導者として誰しもがそういう思いはある。

特に保育者を目指す初心者でも和音感覚を身につけさせる事は、弾き歌いの伴奏に大変役に立つことであると考える。このことを“バイエル”で実践していく考えを述べる。

2. “バイエル”の教本内容、和音構成の有効性

賛否両論あるが、なぜ“バイエル”なのか。

批判の意見の一つ、「単純な基本和音しか使っていない」ことが、ここでは、「単純だからこそ有効に使える」ことを提案する。

では、改めて“バイエル”の和音の構成を確認する。“バイエル”は、最初に、1番‘右手だけ’、2番‘左手だけ’の曲でこの変奏曲が続く形から始まっている。変奏曲なので、スラーや音符の長さ、拍子に変化してメロディーの形が変わっているが、和声進行はほぼ同じである。この和声の部分、指導者が連弾でへ音記号で弾くようになっていく。この伴奏の形も、雰囲気が変わるように工夫されているが、和声進行はほとんど3種類し

かない。はじめに記した、指導者として願う「せめて、ドミソ、シレソ、ドファラは簡単な歌につけられるようになってほしい。」の基礎和音、ドミソ、シレソ、ドファラの和音でほとんど置き換えられるのである。

これだけ単純ということは、初心者にとって「すぐできるかもしれない」という‘これなら簡単そうだから、やってみよう’というやる気をおこさせる効果があるのではと考える。この印象を持たせたい。

“バイエル”とはどのような教則本だったか。私が中国学園紀要第7号で述べた内容を、示す。

【“バイエル”は、ド、レ、ミ、ファ、ソに両手を置いた形でほとんど“手の位置が動かない”ように作られている。ポジションを移動することに関しては、とても注意深く後半に入れている。この“動かない位置”での繰り返しの練習の中でも十分に、音楽の基礎、ピアノという楽器の基礎を盛り込み、音楽的な要素も含み、総合的に間違いなく身につけることができる教本である。】という主旨の内容を述べた。

この下線部分、“手の位置が動かない”ように作られていることにより、左手を単純に和音に変えることがより簡単になる。この“バイエル”の本来の目的のひとつである最低限の動きで練習することも合わせると、相乗効果で和音が早く身につくのではないかと考えている。3種類くらいなら、例えば赤、黄、青の信号なら誰でも見分けが簡単である。見る事より、聞き分けることは、少し難しいかもしれないが、誰でも和音が変わったことぐらいはわかり、なんとなく違う感じもわかる。私は、難しくても初歩の導入から、“濁る和音の音の聞き分けをすること”が、和音感習得に近道ではないかと考えている。

“バイエル”を使用することは、保育者が身につけるべきピアノの技術に効果的につながると考える理由を、もう一つ挙げる。

紀要第7号の内容に、更に今回、“バイエル”の利点を追加する。

“バイエル”の目的の“動かない位置”での練習をすることは、常に目は楽譜だけを見て、鍵盤を見る必要がなくなり、指の感覚だけで弾くことができるようになるということを加えたい。これは、より高度な技術を積み上げるために、最初に身につけなければいけない、ピア

ノ独特の奏法に必要な姿勢である。演奏家として活躍している段階の人でも、体の状態を整理し直すために、更にこの“動かない”ことから技術を練り直す場合もあるほど、注意深く積み上げなければいけない大切な技術の一つであるのだ。初心者対象でも、“バイエル”はこの高度な技術にもつながるよう作られていると考える。

常に目は楽譜だけを見て、鍵盤を見る必要がなくなり、指の感覚だけで弾くことができるようになることは、実は、弾き歌いをするのにも欠かせない姿勢を身につけることになる。このことから、私は、保育者を目指す人にとって“バイエル”は、とても役に立つ教本であると言えると考えている。

3. ドミソ、シレソ、ドファラの和音と指の移動

色々な効果が期待できる“バイエル”を使って3つの和音を身につけるのであるが、実は、用心深くしないと、‘できない’落とし穴に落ちる可能性がある。一度‘できない’落とし穴に落ちると、無意識にその行為が身につけられなくなる。音を最初に弾く瞬間に成功体験をしておかなければ、間違いやすい手を作ってしまう。ここで、3つの和音をそれぞれ検証し、‘難しい’と感じる落とし穴は、どこにあるのか解明する。

身につける段階としては、“濁る和音を聞き分ける段階”は、置いておく。それは、初心者が一つずつの和音の3つの音を一度に弾けるようになった段階で余裕ができた時、初めて聞こえてくるものだからである。

では、はじめに示した、「せめて、ドミソ、シレソ、ドファラ（伴奏としての3つの基礎和音）は簡単な歌につけられるようになってほしい。」の3つの和音とその移動について検証する。

中級者以上の経験者なら、基本の和音3種類を使い分ける事は、少し考えれば簡単である。しかし、初心者は、そうはいかない。和音の3つの音を一度に掴むことも難しい上に、その3種類を掴む指も変えて弾かなければいけない。経験不足もあり、どのように弾いたらよいか、指も音も、すぐには全く頭に浮かばないのだ。

何が難しいのか。音楽上の規則が、考え方にも、指使いにもあるのだが、それを知らない初心者は、自分勝手に弾いてすぐ行き詰まるのだ。では勝手に弾こうとする

と、陥りやすい例はどのようなものか。なぜ、このような事が起こるのか、3つの基本和音の位置や幅について考え、はっきりと認識する必要がある。

「和音が弾けない」理由は、ほとんどが「3和音は、難しい」、「3つの音と指を一度に変えるのは無理」「一度に3つの音などすぐ弾けない」という、ほぼ食わず嫌いに近い漠然とした拒否反応から来ていると考えられる。上手に認識できれば、この落とし穴に落ちないように、3つの3和音を確実に身につけて和音の移動もすることができる。弾けない印象は、闇雲に和音を弾こうとして失敗した経験からすぐ身につけてしまう。最初に鍵盤に手を置く瞬間が、まさに上達するかどうかの境目である。すぐ上達できる時の認識の仕方と、できない場合の理由を明確にする必要がある。

“バイエル”が和音を簡単に掴めるという印象を持つように導入を、上手く準備してくれているので、ここでも“バイエル”を読み始めるように、教本に沿って3つの和音の弾き方を説明する。

“バイエル”の指示を隅々まで用心深く読み、その通りに鍵盤に手を準備できるか、何も見ないで簡単だと決め込んで自分勝手にすぐ弾き始めるか、この瞬間で‘上達する人’、‘上達できない人’が決定すると言っても過言ではない。

“バイエル”の指示通りに示す。

“バイエル”では、何度も言うように、最初に右手も左手も鍵盤上の“動かない位置”に置くことから始める。ここでは、和音を弾く事にする左手だけで考える。

まず、ドミソ。

“バイエル”に沿って、「はじめに、左手の5本の指を5 4 3 2 1 指の順番に、ドレミファソに置く」事になる。この置かれている位置で、5指(小指)、3指(中指)、1指(親指)の3カ所をそのまま押さえる。

これで、5 3 1 指でドミソが弾ける。

これは、全く動かないので、ほとんどの初心者がすぐ弾ける。

次に、必要なのは、シレソ。曲作りに欠かせない和音である。“バイエル”でも最初に伴奏の変化に入れている。では、ドミソからシレソへ移動する。

また、「はじめに、左手の5本の指を5 4 3 2 1 指の順番に、ドレミファソに置く。」ソの1指(親指)はそのま

ま保留し、左手 5 指(小指)と、3 指(中指)を左方向へ、1 音ずつシとレにずらす。4 指(薬指)は、必然的に 5 指(小指)と 3 指(中指)につられて左隣のドへ 1 音移動することになる。

これで、5 3 1 指でシレソが弾ける。

実は、これは、少し難しい。

2 つの指が動くからである。手を開いた感じがはっきりわかる。‘開く’感じが初心者には‘どのくらい’かわからず、不安を与える。

この時確認がある。先ほど省いたが、4 指(薬指)と同様に、2 指(人指し指)は、5 4 3 指をずらした結果として、ファの位置に保つことは難しく、左方向へ引っ張られる。つまり、左手の指は、鍵盤のシドレミに 5 4 3 2 の指が並んで置かれた形になり、ファには指を置かないで空いている。これが正しい指の位置である。1 指(親指)と 2 指(人指し指)の間隔は広がっても違和感がない。手の骨格として 5 本の指の中で一番広く開きやすいので、2 指(人指し指)と、3 指(中指)が開くより、むしろ自然なのである。

シレソを弾くことは、このような自然な移動の内容がスムーズに頭に浮かぶことが、必要である。

この思考回路なら、シレソが弾けるのだ。

最後に、ドファラができるようにする。一曲の中で変化をさせるのにシレソの次に必要な和音である。

では、元のドミソからドファラへ移動する。

また、「はじめに、左手の 5 本の指を 5 4 3 2 1 指の順番に、ドレミファソに置く。」5 4 3 2 指の 5 指(小指)と 2 指(人指し指)で、ドとファがそのまま弾ける。残るラは、1 指(親指)だけ右方向に、1 音ずらす。

これで、5 2 1 指でドファラが弾ける。

1 音と指 1 本の変化なら、シレソへの 2 本の指の移動より簡単である。初心者はあわてず弾ける。

このドファラの手の形は、実は、シレソと同じで、1 指(親指)と 2 指(人指し指)の間隔は広がって、シレソを弾いた時のように 1 音幅が空いている。ドレミファの音に 5 4 3 2 指が置かれた形である。

さて、初心者が、和音を弾くのを簡単に感じられるようになるためには、どのように意識して、思考回路を整えれば、3 つの和音が弾けるようになるか。まず鍵盤上の“動かない位置”に手を置くこと、次に必要最小限の

動きで成功する思考回路を身につけ、簡単にできるという印象を持つことが、大切である。和音が弾けるようになれば、3 つの和音でほとんどの曲が作られている“バイエル”だからこそ、この左手を和音に変えることを多く経験でき、この教本を使うことがとても有効だと考える。

また、“バイエル”の左手を単純化伴奏する練習を行うことは、相乗効果として、和音感、和声感を養うことにもつながると考える。これが、いずれ“濁る和音を聞き分ける”ことにもなる。このような結果を期待できる理由からも、“バイエル”の左手を 3 つの和音で単純化し、伴奏できることはとても大切だと考える。

4. 弾きやすい和音の考え方

何度も例に出すが、一般に「せめて、ドミソ、シレソ、ドファラは簡単な歌につけられるようになってほしい。」と言われるが、実は、和音基本形は、ドミソ、ソシレ、ファラドである。

なぜ、一般的に基本形ではない言い方をするのか。音楽を少しでも専門的に勉強すればこれは当たり前である。和声の進行上、近い音に移動する規則があるのだが、なぜそれが良いのか。

ここで初心者のためにどうしてその進行が良いのか検証しておく。基本形が弾きやすくて良いところもあるのではない。音楽上の規則についてはここでは保留にしておいて、基本形で練習してはいけないのか。どのような和音の形が、弾きやすいかによって、練習の効果が増すので、和音の弾きやすさを調べてみたい。

まず、和音基本形の、ドミソ、ソシレ、ファラドで考える。

これらは、それぞれ 1 つの和音だけなら、そのままの場所で弾くのが簡単である。全て、音程の上下幅がそのまま 5 度で、1～5 指を並べて置いたままで 3 和音を弾く。置いたまま 1 指、3 指、5 指を意識して、その場所で押さえればよいので、手の形が全く動かないまま弾けることがわかる。これが一番手の形が動かず簡単である。初心者のためにはこれでいいのではないかと考える。しかし、ドミソ、ソシレ、ファラドと連続し弾くことを試みると、途端に難しさが身にしみる。このまま選んで

弾くには、鍵盤上で手が反復横跳びのような跳躍を必要とする。ドミソからソシレは遠い。1音近いがファラドもやはり遠い。

ポジションを変える跳躍の段階は、“バイエル”の中では、62番でやっと出てくる。和音の移動は、難易度が増すので、“バイエル”はこの曲を注意深く挿入している。和音ではなく、右手、左手のドレミファソ音階で、出している。片手の最初の音が1音なら、音から音へオクターブ飛んでも掴むことができる可能性があるとして、この5音の音階での跳躍を出している。一度に3音の和音を飛んだ先で掴むのは、本当に難しい。音階なら順番に1音ずつ考えるので妥当なレベルなのである。62番は、それまでの譜読み力の、総合確認のような曲になっている。“バイエル”の内容がいかに注意深く丁寧に、ピアノの鍵盤と手を一体化させながら、譜読みを進めているか、改めて感心させられる。

弾きやすさの観点に戻ろう。そもそも和音の基本形だけでは、弾くことが大変困難であるのだ。楽典の常識として基本形での3和音の進行が禁止されているのは、この点からも納得できる。

やはり一般に言われる「せめて、ドミソ、シレソ、ドファラは簡単な歌につけられるようになってほしい。」の近い和音の転回形への進行が、技術的にも、理論的にも良いことがわかる。

それぞれの移動については、前の項で述べたが、移動するときの感覚で、“バイエル”を使用するならば是非意識してほしいことがある。

移動が簡単に感じられるようになるポイントは、‘近い’と思える認識であることである。それは、詳しく言いかえると「保留する動かない音があること」と、常に「隣の1音に移動すること」である。

私は、この2点が大変重要なことであると考えている。このことがあるおかげで、“バイエル”の“動かない手”を身につける」意図に沿って、ほとんど「動かない”感覚”」の中で、3つの和音を弾く“感覚”を持つことができる。要するに“バイエル”の意図も含んだ上に立って、改めて簡単だと思えるようになるのである。ここまで身につけられたら、実はいつの間にか和音を掴む感覚を持つ和音感、聞く耳を育てる和声感、更に、幅の違う和音を掴むので、鍵盤の幅感を身につけさせるこ

とになると考える。

この理想の段階を早く達成するために、初心者に対して、更に、和音の弾きやすさを考慮した教本が多数出ているので内容を紹介しておく。

シレソをシファソに変えて弾くのだ。理論的には、この和音は、3和音ソシレどころか4和音のソシレファを使う考えで、高いレベルになる。第5音のレを省いてシファソと弾く。しかしこの形が意外に簡単なのである。これは、素晴らしいアイデアで、初心者の方に導入の人なら、このシファソの和音を弾くことを私も薦めたい。

先ほど「保留音があること」が、「動かない”感覚”」を身につけるポイントの一つであると述べたが、3つの和音の移動で、シファソを使うことは、常にこの「保留音があること」に近い感覚が実現でき、移動を簡単に感じられる大きな原因になるのである。

では、どのように簡単なのか、ドミソからの移動例で再度シレソへの場合と新たにシファソへの場合を、比較しておく。

保留音は、わかりやすいように□で表す。ドレミファソの鍵盤の位置に置いたままの指番号には、下線を引く。下線が多いほど、動かない感覚が増し、簡単な印象になる。

まず、シレソへの移動の難しさを思い出してほしい。

例①

「ドミ□→シレ□→ドミ□」なら

「5 3 1指 → 5 3 1指 → 5 3 1指」で弾く。

左手5指と3指が左隣の鍵盤に一つずれてまた、もとに戻る。□の1指は保留され動かない。しかし、左手5指と3指という2本の指を移動する。指2本の位置を一度に動かすことは、初心者には、実は、大きな移動である。

そのため、例①の場合、実際は下記のような問題が起こりやすい。

「5 3 1指 → 5 4 1指 → 5 3 1指」と弾いてしまう人がよくいるのだ。下線の鍵盤に指を置いたままの指で、間違いが起こりやすいのだ。なんと、簡単に感じる、その場所で弾ける音は、増えている。“動かない”“感覚”に沿っているではないか。

しかし、なぜ、レが4指なのか。

シの音は、指を置いていない新しい音なのでしかたなく5指だけ、まず1本だけ指を動かすことになる。他は指と

音を固定した形で“動かない“で見ると、既にレは4指が触って準備できている。動かない位置では、レは4指だったのでそのまま使えるから自然に弾きやすいのだ。

では、これをシファソで試そう。

これがなぜ良いのか。

「ドミソ→シファソ→ドミソ」なら

「5 3 1指→5 2 1指→5 3 1指」で弾く。

保留の□は、シレソの時と同じである。

なんと、先ほど4指の間違いの指使いではあったが、“動かない”“感覚”が増えたと同じ下線位置になっている。シレソのときより、“動かない”“感覚”で弾けるのだ。しかも、ここで2本の指の移動は、ない。

「5 3 1指→5 2 1指→5 3 1指」と弾くには、□のファは2指、ソは1指に既に固定されている！ので、1本だけ5指を動かすので、初心者にとっては本当に簡単になる。

薦められる理由がわかる。しかも、ファを使うことで、3和音より広がりのある良い響きに感じられる。これ以上の策はないであろう。

このように、先駆者の意見を取り入れ、工夫をしてみることは、初心者のレベルによって必要だと考えられる。

5. “バイエル”の利用の仕方

“バイエル”の何番までで、どのような練習ができるかは、“バイエル”の教本に沿って和音を使うべきである。36番までドミソ、シファソで伴奏の練習ができる。ここでは、やはりシレソより成功率の高いシファソを薦める。

“バイエル”は、36番までは、2番の左手の練習、32番、33番、34番を除くと、ドミソ、シファソ2種類の和音が弾ければ、伴奏できるのだ。属和音のソシレの響きを身につけるのに、この変化だけを、多数経験することになる。

ドミソ、シファソは、ここまでの経験で身につける。右手もすぐ読めるようなら、2回目にまた1番から、シレソの手の形に直し36番まで挑戦することを薦める。

“バイエル”は、ト長調をなぜ挿入しているのだろう。

“バイエル”は、少しずつ変化を聞き分ける耳を無意識の中で練習させていると考える。

“バイエル”2番左手の練習は、ト長調の練習である。調号としてト音記号の横にファのシャープは出てこない

が、ソが主音である。しかし書き方は、ハ長調になっている。これは、まず白鍵を中心に手の位置を定め、ト音記号の譜読みに慣れることだけを目的にしているためだと考えられる。黒鍵に指を動かすことの手動きも初歩の導入では、下手な使い方をすると大きな動きになるので危険を避けていると考えられる。

32番、33番、34番もト長調でソが主音。これは右手のト音記号譜表の上に加線が出た曲。37番もト長調。左手ト音記号譜表下に加線が出た曲。譜読みできる譜表の幅を2オクターブ以上に広げている。

“バイエル”の目的としては、ト音記号の譜読みをしている間に、ハ長調と、その属調であるト長調の和声感を身につけられるように、調号を使わない早い段階でも主音の位置を変えて出していると考えられる。指導者の連弾の伴奏楽譜は、全てト長調のシャープ記号が記入されているが、生徒の楽譜の書き方は、ハ長調であるので生徒にとっては簡単な印象を持つようにしていると考えられる。

37番から40番もト長調。更に、41番から43番でイ短調を経験する。イ短調もハ長調の平行調として早い段階で経験させているものと考えられる。

ト長調に慣れてきた37番から40番では、譜表の下の加線を追加して左手で読むことを挿入している。41番から43番では、短調の響きを聞かせるのが第一の目的ということで、32番から34番で右手の譜表上の加線を読むことをしたが、これを再経験させながら左右が全く同じ旋律になるユニゾン挿入している。

44番からは、リズム、音符のバリエーションが広がるが、今回の目的である‘初心者が3つの和音の練習を行う’ためには、メロディーが複雑になり、譜読みのレベルが高くなるので使わない。

36番までで、1回目にドミソ、シファソの伴奏ができ、2回目には、ドミソ、シレソの伴奏でもできるようになったら、先ほどのト長調、イ短調の伴奏に挑戦することを薦める。

ここで、提案がある。ト長調とイ短調の和音伴奏を行う場合、黒鍵を使うことになるからだ。できるだけ手を動かさない練習から始めることを薦めたいので、次のように和音を使ってほしい。

和音の形を整理する。

ドミソはハ長調の主和音なので、ト長調では、ソシレを使う。同じ理由で、属和音シファソは、ト長調では、ファシャープドレである。しかし形を変えてラドレを使うことを薦める。“バイエル”は、ト長調の調号であるファシャープを使わずに、楽譜を書いている。白鍵の範囲で手をできるだけ動かさない範囲での技術を身につける意図を守りたいと考える。

この考え方から、2番、32番、33番、34番、37番、38番、39番、40番にでてくるト長調の伴奏では、ソシレ、ラドレで行うことを薦める。

同じように考えて、41番、42番、43番にでてくるイ短調の伴奏もラドミと、ソシャープレミが、正解であるがシレミに置き換えることを薦める。

こうして“バイエル”の前半は、2種類の和音伴奏に置き換えられる。両手で弾いて、なんだかおかしいと思ったところで、和音を変えれば良いことになる。これで、聞く耳も育つのではないかと考える。

ドファラの和音を経験するのは、49番。

“バイエル”はいったい何をさせているのか。延々と同じことをさせて意味がないと言われる所以である。しかし、これが効果的に身につくやり方なのである。一つの技術を身につけるのに、短時間で効果を上げるには、一つの成果が出るまで一つの目的しか持つてはいけないのである。

“バイエル”では、“動かない手”で、徹底的に“手”の安定を身につけさせ、同時に、和声も“動かない”状態で、徹底的に最初のドミソの3和音の和声感を、“耳”に焼き付けていると考えられる。私は、同じことを延々と繰り返すからこそ、メロディーが和音と合わなくなった時、確実に察知できるようになるのだと考える。

保育者の歌う歌の楽譜は、ほとんどがハ長調で、使う伴奏は、ドミソとシファソ（シレソ）がほとんどである。2種類の伴奏が察知できるようになっていけば、歌の伴奏は、ほとんどこなせる可能性が出てくると考える。

また、これらの歌の楽譜は、シャープ系の楽譜の法が、フラット系の楽譜より多く出てくる傾向にある。シャープ系の方が明るいというのが、その理由のひとつであろうと想像する。“バイエル”もシャープ系から練習するように作られている。バイエル”を伴奏の練習として使うことは、シャープ系に慣れる点からも望ましいと言える。

最後にもう一点、“バイエル”を使うと良い理由がある。保育者は弾き歌いをするために、伴奏か、歌のどちらかを覚えていなければ、両手の楽譜ともう一つ歌の楽譜の部分の全部、3段を見なければならぬ。両手、2段の大譜表も難しいのに、実は、3段の大譜表を読むことになるとは、初心者には、あまりにも難しい技術である。これを克服するのに、“バイエル”は、読める姿勢を身につけさせてくれる。2. “バイエル”の教本内容、和音構成の有効性の項で、利点として加えたことを、思い出してほしい。

「“動かない位置”での練習をすることは、常に目は楽譜だけを見て、鍵盤を見る必要がなくなり、指の感覚だけで弾くことができるようになることができるようになるということを加えたい。」と述べた。

新しい曲を、譜面を見ればすぐ弾けるようになるためには、目は、常に今弾いている所の楽譜の先を読んでいなければならない。音楽は流れて行くものなので、次に弾く楽譜の場所を常に見ていなければ、弾き続けることはできない。鍵盤を見ないでずっと楽譜を見ているという姿勢が身につけていることが必要なのである。

“バイエル”ならこれも身につけられるのである。

弾き歌いは、歌の楽譜を見ながら、右手はメロディー、左手は、伴奏を変えることができるようになれば弾けるようになる。まず、ドミソから変える必要のあるシファソを変えなければいけない場所を察知できれば良いのである。

“バイエル”の前半の作り方を調べ、このことしか目的にしていけないと言える、“バイエル”の36番までで、左手を伴奏2種類、ハ長調ならドミソとシファソにして、是非練習することを薦める。この目的のみを、第一目標に掲げたい。

“バイエル”だからこそ効果があると言いたい。

6. 3和音はどう意識するか

理想を掲げる。3つの3和音が掴めるようになったら、和声感を意識するために、是非イメージを持つてほしいと思う。和音の基本形で、主和音としての響きをよく聞いて感じる事が大切である。

作曲される場合のイメージの例を示す。

ドミソは、ハ長調の主和音。「大地」のイメージ。安定している感じ。

ソシレは、ト長調の主和音。最後には、ドミソに進みたい音。不安定な感じ。連続使用でより前向きな気分の高揚になる。

ファラドは、ヘ長調の主和音。「太陽」のイメージ。飽和状態のような柔らかい感じ。温かい感じ。

このようなイメージを持つことで、少しでも和声感を身につけることにつながると考える。また、この耳が、メロディーに対しても、和音の変化する場面を、察知できるようになることにつながると考える。もちろんこれは、伴奏を3つの種類ならすぐに考えられるようになっている段階での、次の目標である。

“バイエル”で和音を弾く練習を延々としていくことが、単純な繰り返しだからこそ、同じ響きを潜在意識に覚えさせ、微妙な和音の変化も察知する意識が育つことになること期待できるのだ。導入の段階でこの‘和声感を聞く耳を持つ’基礎の部分ができるかどうか、初心者がその後、和音をスムーズに考えられるかどうかの分岐点になると考える。

以上のことから“バイエル”の意図にできるだけ忠実に沿って、練習することを薦めたい。

7. おわりに

一昨年、バイエル崇拜者の一人である私にとって、大変喜ばしい本が音楽之友社から出版された。

「バイエルの謎、日本文化になったピアノ教則本」、著者は、安田寛氏である。

この本の中で、和音教育先駆者の園田清秀氏が、「静かにした手」は「和音を押さえる手」にそのまま使えることを気がついており、和音教育に“バイエル”を使っていたと紹介している。

6.3 和音はどう意識するか項で潜在的に刷り込まれる効果を期待すると述べたが、“バイエル”は、和音が弾けるようになるだけに留まらない効果をもたらす教本だと、私は考える。このことは、安田寛著の「バイエルの謎」を読んで、更に確信した。安田氏がこの本で“バイエル”の序文にバイエル自身が次のように書かれていると、紹介しているのを示す。

「この小品は将来のピアニストができる限りやさしい仕方
でピアノ演奏の美しい芸術に近づけることを目的として
いる。・・・」

ピアニストを目指し、美しい芸術に近づけることを目的とすると言うのは、計り知れない目的意識の高さである。

現在の教本に示されているまえがきを比べると、安易なことを強調する言い方になっているのが残念である。現在の教本のまえがきを示す。

「この本は、はじめてピアノをひく人が最もやさしい方法で、
良いピアノ奏法を会得するように手ほどきをするという目的
をもっています。・・・」

バイエル自身の序文に忠実なら、音楽家としての技術、音楽性全てを含んで、初心者最初の段階から意識を高く身につけることを目的としている教本だと示していたものが、現在では、初心者でも簡単にできるピアノ奏法を身につけることを目的にしている序文に変えられている。見た目には同じ練習をしていますが、この意識の違いで、身につくものは遙かに違ってくるものである。

この序文は、是非バイエルの言い方に忠実にもどしていただきたいと願う。

一見何もしていないように見える内容は、実は、専門家に通じるための、潜在意識レベルに影響する良い効果をもたらすように構成されていると考える。

私は、“バイエル”を使つての和音教育を推奨する一人である。他にもどのような教育例があるのか、比較、検討できる資料を今後も収集して行きたいと考える。

今回の考えを元に、実際に初心者の、特に保育者を指す学生に練習をしてもらい、実践の効果がどのように出るか、今後データを集め、更に効果的な練習方法を研究したい。

参考文献

1. 安田 寛：「バイエルの謎 日本文化になったピアノ教則本」音楽之友社 2012年
2. 「標準バイエルピアノ教則本」全音楽譜出版社
3. 大山佐知子：「ピアノ基礎技法～初心者のためのバイエルピアノ教則本～」中国学園紀要第7号 P77-81 2008年